

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	放課後等デイサービスHappiness Life		
○保護者評価実施期間	R7年 12月 1日		～ R7年 12月 19日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	14	(回答者数) 11
○従業者評価実施期間	令和7年 12月 1日		～ 令和7年 12月 3日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	8	(回答者数) 8
○事業者向け自己評価表作成日	2025年12月24日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	・保育士、児童指導員、作業療法士など多職種の支援員がいることで個々の発達に応じた心と身体に寄り添った支援ができる。	子どもの支援についての話し合いを多職種で行い、それぞれの専門的な視点からの意見を聞くようにしている。それを個別支援計画書に落とし込むことで多角的な視点からの支援が行えるようにしている。	・多職種の専門性を活かした支援体制をさらに充実させるため、職種間の情報共有やケース検討の機会を設け、支援方針の統一と支援の質の向上に取り組んでいく。 ・様々な研修に参加し、個々のスキルアップを図る。
2	・室内・室外でテニスが出来る環境がある。 ・テニスを通して、繰り返し取り組むことで技術が向上する経験や、努力が成果につながる体験を積み重ねることができ、達成感や自己肯定感、自信の育ちにつながっている。	・すべての子どもがテニスに触れることが出来るように日々の活動計画を立てている。 ・一人ひとりに合った小さな目標を設定し、達成感を得やすい活動内容としている。 ・勝ち負けに偏らないよう、協力してラリーを続ける活動や役割分担を取り入れ、楽しみながら継続できるよう配慮している。	・テニス活動の様子や成長の過程を写真やおたより等で保護者に共有し、家庭と連携しながら自信の定着を図る。 ・室内・屋外それぞれの環境特性を活かし、体力づくり・集中力・ルール理解など多面的なねらいを持った活動展開を行う。
3	「社会で生きるために必要なこと」を意識した支援を行っている	気持ちの良い挨拶、感謝の言葉を職員が意識的に言うことで見本となれるようにしている。 お買い物体験やおやつ選びを通じて楽しみながらお金の扱い方を身につけられるように取り組んでいる。	・次に必要な課題を意識的に探し、どのようにしたら習得できるかを職員間でアイデアを出し合っている。 ・将来を見据え、学年が上がるにつれてより実社会を意識した課題設定(時間管理・選択と責任など)に移行していく。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	学年が上がるにつれて、学校や他の活動との兼ね合いにより利用時間が短くなる傾向があり、支援内容や関わりの深さに限界が生じている。	・高学年になるほど下校時刻が遅くなり、通所可能な時間が短縮されている ・習い事や家庭での予定が増え、継続的・集中的な支援時間の確保が難しくなっている ・限られた利用時間内では、個別支援と集団活動の両立が難しい場合がある	・短時間利用でも効果が高まるよう、支援内容の重点化・構造化を行う ・個別支援計画に基づき、限られた時間でも目的が明確になる支援を実施する ・保護者と連携し、家庭や学校での様子を共有することで、通所以外の場面も含めた支援につなげる ・利用時間帯や支援方法について柔軟な工夫を検討し、継続的な支援が行える体制づくりを進める
2	自然に触れることが少ない環境にある	・事業所周辺に公園や緑地、自然体験ができる場所が少なく、日常活動が屋内中心になりやすい ・移動手段や安全面への配慮から、遠方の自然環境への外出頻度が限られている ・学校や他の活動との兼ね合いにより、外活動に十分な時間を確保しにくい	・近隣の公園や緑道、季節を感じられる場所を再確認し、短時間でも実施可能な自然体験活動を計画する ・意識的に戸外での活動を多く取り入れる。
3	支援内容や活動の意図・目的・ねらいを十分に発信できておらず、保護者や関係者に正確に伝わっていない	支援や活動の説明が、結果報告中心になっており、「なぜその活動を行っているのか」「どのような力を育てているのか」といった背景説明が不足している。 保護者が理解していることを前提に説明を省くなど、受け手目線の発信が十分でなかった	「活動内容+ねらい(育てたい力・支援の意図)」を意識して伝える。 支援の質そのものだけでなく、支援の意図や価値を「分かりやすく伝えること」も支援の一部であるという認識を持ち、発信力の向上に取り組んでいく。